

信頼と継続的關係における安心：
リアルタイム依存度選択型囚人のジレンマゲームを用いた実験研究

寺井滋・森田康裕・山岸俊男

キーワード： 信頼、安心、協力、囚人のジレンマ

1990年代以降、欧米の社会科学全般において、信頼が社会において果たしている役割について盛んに研究が行われている（e.g., Fukuyama, 1995; Putnam, 1993）。その背景にあるのは、欧米社会における信頼のレベルが低下しつつあるとの危機感である。言うまでもなく、信頼は社会の効率性を高める「潤滑油」の役割を果たしており、信頼レベルの低下は信頼社会の崩壊につながる可能性のある重要な問題である。欧米社会同様、日本社会においても信頼に多くの関心が向けられている。山岸（1998）では、日本社会が抱える問題は信頼社会の崩壊ではなく、むしろ信頼社会の創造ができるかどうかだとされているが、旧来の日本型社会関係の回復であれ、新しい社会関係の創造であれ、信頼は日本社会の行く末を定める重要な要素の1つであると考えられる。

本研究では、2者間の継続的關係に焦点を当てた。本研究には2つの目的がある。第1の目的は、「依存度選択型囚人のジレンマゲーム」を用いた先行研究（垣内・山岸, 1997; 松田・山岸, 2001）の追試を行うことである。これらの先行研究で実施された実験では、実験参加者が80%前後という高い協力率を示したことが報告されている。本研究では、実験課題を部分的に変更した場合にも同様の高協力率が得られるかどうかを検討する。本研究の第2の目的は、これらの先行研究において実験参加者同士が構築した關係が、見返りの期待できない場面でも協力し合う「本当の」信頼關係であったのかどうかを明らかにすることである。継続的關係での相互協力を支えるものは關係が継続しているというまさにその点にあることを議論する。ここではまず、第1の目的のために、信頼關係を扱った従来の実験研究について簡単に見ておきたい。